かたりべ143

豊島区立郷土資料館・芸術文化推進グループだより

区制90周年特別展 豊島大博覧会

600点以上のコレクションを一堂に紹介！ ～過去から学び、今日を生き、未来に希望～

昭和七（一九三二）年一〇月一日に豊島区が誕生して九〇年。これを記念して、郷土資料館をメイン会場とした「豊島大博覧会」を、五月二八日（日）まで開催しています。

サブタイトルの「過去から学び、今日を生き、未来に希望」の九〇周年メッセージを、展示でどう表現するか何度も検討を重ねました。ヒントとなったのが、明治一〇（一八七七）年に開催され、三代歌川広重が描いた「東京上野公園内国勧業博覧会美術館荘飾之図」です。天井まで壁一面にびっしりと並べられた書画や工芸品に、たくさんの見物客が驚嘆する様子が描かれています。明治期に始まった博覧会は、産業・歴史・美術など新旧の文物を一堂に集め、広く国内外に紹介する国の一大イベントでした。大正期に東京府が開催した博覧会では、東京の都市計画や数多くの模型などが展示されました。

これに倣い、令和版の「豊島大博覧会」では、近郊農村から国際アート・カルチャー都市へと大きな変貌をとげた豊島区のあゆみを、六〇〇点以上の郷土資料、美術・文学作品と映像、模型、ジオラマを使って紹介しています。さらに区制一〇〇周年にむけた豊島区の将来像を、池袋周辺の大型模型と映像で紹介する第五章「輝く未来（としましんじだい）」は、本展の大きな特色となっています。

今回、特別協力として、山本高樹氏、隈研吾氏、植田志保氏、水戸岡鋭治氏の皆様に作品を制作・出品いただきました。

ぜひ会場にお越しいただき、博覧会ならではの作品群の迫力と豊島区の豊かな歴史・芸術文化を体感いただければと思います。何度見ても新しい発見があるはずです。

（郷土　横山恵美）

特別展会場入口

第１章　豊島区誕生前史

第３章　豊島区の繁栄と副都心池袋

第４章　国際アート・カルチャー都市

区制90周年特別展記念

美術見どころガイド1 ―展示のおとも―

すべて豊島区所蔵作品!!

豊島大博覧会にお出かけいただきありがとうございます。区制九〇年を記念した豊島大博覧会では、過去から未来までの豊島区の変貌と展望をご覧いただいています。ここでは、誌上ギャラリートークとして見どころをお伝えしたいと思います。［K］

今回の展示は五つの章立てで構成されており、いくつかのテーマが元になっています。その中からピックアップしてご紹介していきましょう。絵画作品と一緒に、郷土資料や文学・マンガ分野の資料も見ることで、それぞれを多角的に知ることができるでしょう。

■風景

豊島区と言えば今やビル群に加えて世界有数の鉄道乗降者数を誇る大都市ですが、この姿に至る変遷を作品で辿ることができます。失われた風景を絵に求めてみましょう。区が誕生する一九三二（昭和七）年頃は牧場や麦畑が広がる農村地帯がまだまだありました。河野通勢《長崎村の風景》や内ケ崎光枝《牧場の一隅（秋）》など、家もまばらで空も広いのどかな風景を今に伝えています。

図1

齋藤求《パルテノンへの道》（図1）のように一九三〇年代から区内に多く建ち並んだアトリエ付き貸家の、北向きの天窓が規則正しく並ぶ風景画、あるいは榑松正利による心象風景の《夢》もあります。戦後には、区内に住んでいた高山良策、鶴田吾郎や吉井忠らが、一一回にも及ぶ空襲によって荒廃した池袋駅付近や自宅近辺の身近な土地の姿を残しています。

■学校

豊島の区制開始前には、広い土地が確保できることを理由に多くの学校が開かれました。田中佐一郎や小熊秀雄によって立教の校舎が描かれますが、小熊が描いた場所の校舎は現存し、今も行くことができます。宮平清一による学習院敷地内にある血洗の池、春日部たすくによる豊島師範学校前の目抜き通りとその奥に覗く校舎など、学校は象徴的なランドマークとして作家を引き付けるようです。当時の写真や舟崎克彦によって架空の地として描かれた地図（モデルは学習院）なども併せてご覧いただくと、より楽しめるでしょう。

図2

■顔カオかお

長崎地域にアトリエ付き借家が多く建ち、それを機に芸術家たちが集住するのと、区制開始時期はほぼ時を同じくしていました。ここに集う芸術家が池袋にもたらす空気を詩人小熊秀雄は池袋モンパルナスと称します。二章の壁面にはその池袋モンパルナスの時代を生きた人たちの顔がたくさん並んでいます。特大の油絵あり、早描きのスケッチあり、ぼんやりどこかを見つめていたり鋭くこちらに目線を向けたり。自画像があれば別の人が描いた「他」画像もあります（図2）。豊島区に実際に住み、制作に励んだ芸術家たちはどんな人たちだったのか、個性の異なる画風や顔を見て想像してみるのはいかがでしょう。

■身の回りのもの

人々の生活の痕跡は生活資料だけでなく、絵画作品の中にも表れています。小熊秀雄は街と集う人々の様子をたくさんのスケッチにしました。高山良策の雑煮や干物といった食べ物のスケッチはなかなかおいしそうに見えますが同時に戦後の厳しい食生活の中で描かれたであろう切実さを感じざるを得ないものです。初出展となる、小林猶次郎《破れ靴》は黒い軍靴がカンヴァスの中央に描かれ、その周りをさまざまな小さい野花が取り囲んでいます。戦時下で履き古されくたびれた靴が、野花にいたわられているかのようです。

■戦後の芸術家たち

三章に展示されている作品はバラエティに富んでいます。作品だけではわかりませんが、芸術家同士には交友があ

りました。例えば《そこあさり》の作者、山下菊二と家が隣同士だった《開花期》の作者桂川寛、山下をライバルと公言していた高山良策、山下とともにルポルタージュ絵画を描き、ともに展示をした《島・B》の作者中村宏などがいます。出征や空襲の被害などで、豊島区に住む芸術家は一時的に減りますが、戦後戻った人、引き続き住み制作する人もありました。三章にはそのような芸術家たちの作品をまとめています。［H］

■豊島公会堂

中野素昂《希望の像》と土橋醇一《はかりのある室内》は、当時豊島公会堂のロビーに設置されていたものです。旧豊島区役所・豊島公会堂・旧豊島区民センター周辺の記憶がある方々は、ジオラマの中に〝入って〟みてください。これがあった！と、思い起こされるのではないでしょうか。旧豊島区役所B館で働き始めた私には、とても懐かしいジオラマと作品たちです。

図3

一九八四年の開館以来、郷土資料館の展示の中核を担ってきた「長崎アトリエ村模型」にも改めて新鮮な視線を向けていただきたいです。完全な形でのアトリエ付き住居が残っていない今、この模型は当時の様子を伝える貴重な模型であり、アトリエ付き住居の典型的な例としてご紹介しています。そのそばで、豊島区に構えられていたアトリエや、そこで制作をしていた作家のアトリエの映像を流しています（図4右）。二〇一四（平成二六）年からアトリエの撮影を始めたのは、創造の場であり「池袋モンパルナス」が生まれるためには欠かせない、豊島区にとって重要なアトリエ付き住居を記録しておきたかったからです。撮影後に取り壊されもう残っていない家もあります。作品だけではなくこの映像の貸出依頼もある今*、これまで制作してきた九本を全て公開しています。［K］

図4

作品と資料で壁面を覆い尽くした本展は一九世紀末の博覧会に倣ったものなので、「豊島大博覧会」と銘打っています。万国博覧会も、内国勧業博覧会も、当時の写真や絵画を見ると壁一面が作品でおおわれていたことがわかります。本展においてそうした「博覧会方式」を試みた中で皆様に推し出せるのは、これまでご覧いただく機会がなかった作品を展示できたことです。一〇〇点を超える美術作品のうち、初出品は一八点を数えます。それらは時に高い場所に展示されています。ご覧になりにくい場合のために、双眼鏡をご用意しております。ご覧になりたいところだけを集中して見るという体験は、ちょっと探検しているようではありませんか？　展示を見ながら遊べるクイズ形式の手作りワークシートもあります。さあ、作品・資料の森を、海を、ゆっくりとご堪能ください。［K］

＊こちらでもご覧いただけました。←開館五〇年記念　夭折の画家たち―青春群像―展、笠間日動美術館、二〇二二年一〇月一日～一二月一八日。「豊島区立郷土資料館のアトリエ復元模型」二〇二一年、七分五秒。

（美術：小林未央子［K］、堀口麗［H］）

図5

図1：齋藤求《パルテノンへの道》1971年
図2：寺田政明《小熊秀雄像》1935年
図3：3章展示風景。右に中野素昂《希望》1955年、左壁面上方に土橋醇一《はかりのある室内》1952年
図4：右・iPadでの映像上映、左・長崎アトリエ村模型のアトリエ内部の様子
図5：2章展示壁面

特別展文学コラム①

巣鴨に集った女性作家たち

区制九〇周年特別展の開催にあたり、文学・マンガ分野では、今回の一四三号から一四五号まで、各章の見所や展示資料についての解説を連載していきます。

今回は、第一章「豊島区誕生前史　むかしのとしま」の女性作家と児童文化コーナーから、巣鴨に集った女性作家たちをご紹介します。

学校もその街道（※板橋街道）ぞいにあるのだから、山下肅雨は荷馬車のあとを追うかたちで草葺屋根のあいだや、野良着のせんたく物のかかった坪庭のまえを横ぎったりして小娘をそのほうへ連れだした。空虚にひっそりとした古街道である。まっすぐにしばらく進むと、左際に芽だちの森が奥ふかくつづいていた。日本女学院にやっと着いたのである。

一八八五（明治一八）年に木村熊二・鐙子夫妻によって創立された明治女学校は、一八九七年に北豊島郡巣鴨村に移転しました。一九〇〇年には作家の野上弥生子（一八八五―一九八五）が、巣鴨時代の明治女学校普通科に入学し、六年間在学しました。冒頭の引用は、明治女学校での生活をもとに、野上が最晩年に書いた自伝的小説『森』（一九八五年、新潮社）です。

『森』は、一九六七年に起筆され、一九七二年から、亡くなって未完の遺作となる一九八五年までの一三年間にわたって雑誌『新潮』に連載されました。

野上が明治女学校を卒業した五年後の一九一一年には、平塚らいてう（一八八六―一九七一）により、婦人文芸同人誌『青鞜』が発刊されました。

一九一三（大正二）年には、青鞜事務所が巣鴨に移転します。ちょうどその頃、野上もまた巣鴨に引っ越してきました。その翌年には、平塚らいてうも巣鴨のとげぬき地蔵の裏通りに暮らし始めます。

『青鞜』に寄稿していた野上のもとを、当時『青鞜』の仕事を手伝っていた、伊藤野枝（一八九五―一九二三）が訪ねることもあったといいます。その頃のことを、野上は次のように振り返っています。

もう十年からになります。その頃染井に住んでおりました私どもの家のすぐ後に、いつも上手な三味線や尺八のねがして、陽気な笑声にみち、いかにも楽しそうに暮らしている一軒の家がありました。また丁度その時分平塚さんが重になって出していらした『青鞜』の用事で、ちょいちょい私の玄関まで来てくれる若い小柄な女学生風の人がありました。

（中略）丁度その頃は私も小さい赤ん坊をもっていましたので、若い母親同士の同情と理解並びに忙しい育児や家事の間にもなお勉強だけは怠るまいとするような共通の努力が、私たちを急に親密にいたしました。（「野枝さんのこと」『女性改造』一九二三年一一月八日）

二人の交流は主に、野枝が巣鴨を去るまでの二、三年の間だったようですが、野枝が亡くなる前年には、手紙のやりとりもあったといいます。

混乱する時代の最中、女性の解放と自立をうたう女性たちの交流が、巣鴨でありました。

一人の作家の人生を辿っていくと、一人、また一人と作家との繋がりが見えてきます。同じ時代を生きた作家同士が、同じ場所に集まったり、たまたま同じ場所に住んでいたり、もしかしたらこの道をすれ違ったりしていたのかもしれないと考えるのもまた、文学の周辺を見ていく楽しみのひとつです。今回の展示では、美術作品、郷土資料と一緒に展示しておりますので、その楽しみはさらに広がっていくのではないでしょうか。

【参考】平塚らいてう『元始女性は太陽であった―平塚らいてう（上巻）』一九八一年、大月書店／伊藤野枝『伊藤野枝全集　上巻』一九八六年、学芸書林／竹西寛子編『野上弥生子随筆集』一九九五年、岩波書店

（文学・マンガ　西方ゆり恵）

令和の時代、「昭和レトロ」にご注目！

令和四（二〇二二）年一一月三日、トキワ荘通り昭和レトロ館（豊島区立昭和歴史文化記念館、豊島区南長崎三-四-一〇、以下「レトロ館」）が開館しました。この施設は、昭和の歴史・文化を次世代に継承するとともに、地域文化の発展及び地域の活性化に寄与することを目的として、この地で長年にわたり親しまれてきた味楽百貨店（複数の店舗で構成される一棟式マーケット）に整備されたものです。郷土資料館では、レトロ館二階の展示室1～4、および多目的室2の展示（企画から列品まで）を担当しましたので、本誌上でその概略を紹介いたします。

展示室1 矢島勝昭 昭和のくらしギャラリー

郷土史家矢島勝昭氏（一九二九年生まれ）による、昭和の暮らしを描いた原画等を展示しています。矢島氏自身が幼少期に体験したおもに戦前、戦中期の日常生活を優しいタッチで描いています。

展示室2 昭和のくらし～昭和40年頃の日常～

和室六畳間に若い夫婦が暮らしていることを想定して、調度品や衣類・寝具を配置、当時の生活を再現展示しています。時代は高度経済成長期、白黒テレビ、真空管ラジオ、電気炊飯器など、家電製品が一般家庭に広く普及したころの暮らしぶりをご覧ください。

展示室3 昭和のおもちゃコレクション

お手玉、おりがみ、万華鏡、積み木といった昔ながらのものから、ドールハウス、ミニカー、キューブ型パズルなど比較的新しいものまで展示し、実際に体験できます。いずれも昭和の時代から現在まで支持されているもので、遊びながら世代を超えて盛り上がりましょう。

展示室4 おもちゃの鉄道DE池袋駅

豊島区が誕生した昭和七（一九三二）年と現在の池袋駅構内をおもちゃの鉄道模型で再現しています。この九〇年間で池袋駅構内の様子が大きく変わったことがよくわかります。なお、この池袋駅構内の再現展示は、プラレーラーとして活躍されている松岡純正氏によるものです。

多目的室2－特別企画展 タイムトリップ 豊島区の90年

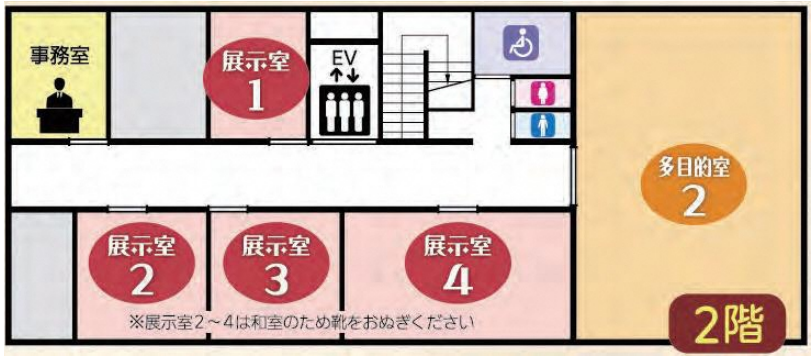
昭和から平成にかけて撮影された風景と、ほぼ同じ場所から撮影した現在の風景を比較、時代の移り変わりを読み解きます。また、ジオラマ作家として著名な山本高樹氏による人世横丁（豊島区東池袋）、と神田川周辺（豊島区と新宿区の区境）のジオラマ模型を初公開しています。

ぜひ一度レトロ館へお出かけください。

（郷土　秋山伸一）

《利用案内》

開館時間　午前10時～午後6時
（入館は午後5時30分まで）
休館日　月曜日（祝日の場合は翌平日）
年末年始、展示替え期間
入館料　無料（一階マンガピットは有料）



＊展示室３・４、多目的室２の展示は５月28日（日）まで開催
＊トキワ荘通り昭和レトロ館　Tel. 03-3565-6991

展示室４

展示室２

展示室１

多目的室２

展示室３

トキワ荘通り昭和レトロ館外観

区制90周年企画展 開催報告
昭和の暮らしと遊び ～昔の遊びを体験してみよう～

郷土資料館では、区制九〇周年記念事業の第一弾として、昨年五月五日から八月二八日まで、「昭和の暮らしと遊び～昔の遊びを体験してみよう～」を開催しました。戦後の復興期から高度経済成長期にかけて、街の景観や私たちの暮らしは大きく変わりました。企画展では、令和の時代を迎えた今、改めて昭和の時代を郷土資料、美術・文学作品を通して振り返るという趣旨で、区民の方からの寄贈資料を中心に初公開も含めて四〇〇点余の作品・資料を展示しました。

「遊びと家電製品」のコーナーでは、当時普及した家電製品やおもちゃ、遊び道具、絵本、『婦人之友』『それいゆ』『暮しの手帖』などの雑誌を一堂に紹介しました。「昭和の情景」のコーナーでは、区内在住の矢島勝昭さん（昭和四年生れ）が子供時代の暮らしや遊びを生き生きと描いた作品を画像で紹介するとともに、池袋モンパルナスの画家の作品を展示しました。

さらに昭和三〇～四〇年代をイメージした暮らしを四畳半の和室二部屋で再現し、実際に部屋にあがって鏡台や机、箪笥の引き出しの中にある道具や着物などを見ていただけるよう工夫しました。

また今回は展示だけでなく「体験」に重きを置き、子どもたちが熱中した遊びが体験できるコーナーや、紙芝居、レコード鑑賞会、映画上映会、はんこペタペタなどのイベントも数多く実施しました。

遊び体験コーナーでは、めんこ、コマ、けん玉、輪投げ、紙ふうせん、おはじき、積み木、だるま落とし、折り紙、お手玉、リリアン、あやとり、オセロ、将棋、スライドパズルなど用意しました。またNPO法人はばたけ千早、当館友の会にご協力いただき、会期中七回にわたり遊び方を指南いただきました。また紙芝居でも、はばたけ千早のご協力により、創作紙芝居「ふるさと豊島」「としまくの電車」など、延べ四日間上演いただき、多くの親子連れでにぎわいました。

昭和の遊び体験

企画展では再現部屋も含めて露出展示が多く、実際に手に取って遊べる体験が中心でしたので、コロナ禍での感染対策に配慮しながらの実施となりましたが、会期中一万七一九九名の方にご来館いただきました。

ちょうど学校の夏休みと重なり、子どもたちや親子連れで何度も来館される方も多く、若い世代を中心に利用者層の拡大につながったと思います。

紙芝居

昭和・遊び・体験がキーワードの本展では、昭和に子どもだった方も昭和を知らない子どもたちも、世代をこえて昭和の時代を体験し、楽しんでいただくことができました。当館スタッフも来館者とふれあい、様々な感想やご意見を聞く貴重な機会となりました。

企画展にご協力いただいた寄贈者、提供者、関係者、はばたけ千早の皆様に改めて感謝と御礼を申し上げます。

（郷土　横山恵美）

編集後記

「かたりべ」一四三号をお届けします。

区制九〇周年事業の関係で今年度最初の「かたりべ」は一月の発行となりました。特別展は好評につき、会期を延長します。六〇〇点以上の作品資料は見どころ満載です。皆様のご来館をお待ちしております。

（郷土　横山恵美）

かたりべ
No.143
・
2023年1月20日
・
豊島区立郷土資料館
・
東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階
・
電話 03-3980-2351
URL
http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html

11月1日は としま文化の日
SDGs未来都市としま
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
豊島区は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。